

パリ通信

フランスのマスク戦争

外出禁止26日目に入る。

「棕櫚の日曜日」（4月5日）から始まる「聖週間」を迎えた復活の季節に自粛生活を強いられるのは辛いですが、フランスのCOVID-19感染拡大がようやく横ばいになってきた。10日(金)の数字で死者13197人、集中治療中の重症者が7000人を超える厳しい状況は続いているが、救急で運び込まれる数が減ってきたことは救いである。

フランスのコロナ感染拡大は、東部ミュールーズ(スイス・バーゼルから40km、コルマルから45kmに位置するアルザス文化圏)で2月17日から24日に行われた2000人の宗教集会が始まりだった。感染は東から西へと広がり、パリと首都圏を含むイル・ド・フランス地方にその波が押し寄せ、1ヶ月過ぎた3月17日フランス全土が封鎖され、日常生活が一変してしまった。

未曾有の事態に政府の対応は後手に回っているが、医療崩壊を避けることを最優先に、国民が一体となりコロナ戦争に立ち向かうことを繰り返し強調し続けている。最前線の献身的な治療を他所に、外出禁止も4週目に入り、「復活祭」(12日日曜日)の休暇と重なり、初夏のような太陽に緊張感が緩み始めている。

外出許可の詳細は各県知事の判断に委ねられており、夜間の外出禁止令を出す市町村もある。パリの問題はジョギングする人の数が多過ぎることである。10時-19時のジョギングおよびスポーツ活動を禁止したが、19時過ぎにジョギングが集中しただけで意味がない。外出禁止の効果は2-3週間後にしか現れないだけに厄介だ。

パリの南に位置するソー市(Sceaux)では、外出時に「マスク着用」を義務付け、違反者には135€の罰金を課すとした。ところが国はマスク着用義務を取り下げるよう命じた。日本と異なり、フランスにはマスク文化がない。コロナ感染が始まった当初から、マスクは医療関係者に必要で、一般市民には必要ないと繰り返してきたのは、フランスのマスク事情を反映してのことでもある。

2006年「重症急性呼吸器感染症(SARS)」が終息した時点で、フランスはマスクは国内生産から人件費の安い中国産輸入を国策とし、フランスにマスクのストックがなくなった。3月の時点で外科用マスクが1億5千枚あるだけで、FFP2マスク(フィルター機能が優れた医療用)はほぼストックがない。

医療関係者だけでも一日最低15000枚は必要で、急遽国内縫製を始めたが到底追い付く数ではない。医師や医療関係者以外にも、スーパーのレジ、公共交通機関の運転手、警官、老人ホームや介護施設の職員などマスクは幾らあっても足りない。一般市民にまで配ることは当面は不可能である。

国は2億5千万枚を中国に発注したが到着には時間がかかっている。フランス向け発送をアメリカに3倍値で横取りされたりと世界中でマスク争奪戦だ。フランス国内のマスク輸送は現金輸送車さながらの護衛が付いている。フリーの看護師や介護士の車からマスクが盗まれる事態も生じている。

外出禁止をどのように解除していくかは、外出禁止よりも難しい。

経済的な打撃は測り知れず、5月に入れば段階的に外出が許可されるだろう。地方別、年齢別、「抗体」の有無などが検討されているが、一斉テストをしようにもフランスには十分なキット数がない。ドイツのように早い時期からPCR検査をして陽性者の自粛を行ってきた国は死亡数が少ない。

「抗体」テストとマスクは外出禁止解除の大きな鍵になるが、その目処が未だ立たず大問題だ。残る3-4週間の間にどこまで外出禁止解除の準備ができるかが問われている。

フランスにはルイ・パストゥール研究所、ドイツにはロベルト・コッホ研究所、そして日本には北里柴三郎研究所がある。COVID-19ワクチンも必ず開発されるに違いない。ペストの時代から人は伝染病ウイルスと遭遇し、共存せざるを得ない運命にある。

フランスの時間は今止まっている。折しも「聖金曜日」のパリ・ノートルダム大聖堂でミサが行なわれた。昨年4月15日の火災から一年。奇跡的に生き残った聖堂は今も鉛の害や滑落の危機に瀕している。祭壇の飾りも、合唱も何もない痛々しいままの堂内で、火災を免れた「茨の冠」だけが祀られた。

人の力の及ばぬことに畏怖の念を忘れてはならぬ、と告げられているのかもしれないと思う。